

## V 日高振興局

### 1. 重点プロジェクト

#### 【新病害虫や梅干し生産への特化のリスクに強い梅産地づくり】

～新害虫「クビアカツヤカミキリ」の侵入警戒と「露茜斑入果病(仮称)」のまん延防止～

2018年1月に特定外来生物に指定されたクビアカツヤカミキリは、サクラやモモ、ウメなどのバラ科樹木を食害する害虫で、大阪府や徳島県など7府県で被害が確認されている。

昨年7月、かつらぎ町で成虫1匹が捕獲されたことから、県内への被害拡大が懸念されている。また、「露茜斑入果病(仮称)」は昨年7月にみなべ町内で発見された新たな病害である。

このような新病害虫の侵入警戒とまん延防止のため、本年度からの新たな普及指導計画の重点プロジェクトとして取り組むとともに、梅干し生産に特化した農業経営を改善するため、青梅生産のための省力化技術や「露茜」「翠香」といった特徴ある品種の導入を推進している。

5月31日及び6月29日、うめ研究所、みなべ町、JA紀州の担当者らと、みなべ町内のサクラ樹を植栽している20か所について、クビアカツヤカミキリ巡回調査を実施した。今回の調査では発生が確認されなかったが、今後も継続して調査を実施する予定である。

また、「露茜斑入果病(仮称)」の感染状況を把握するため、今年度、県内の「露茜」苗木全樹のウイロイド検定を実施することとしており、6月下旬から検定用の葉採取及びサンプル調製を開始している。今後、7月～8月にかけて順次、実施するとともに、剪定前にはまん延防止のための講習会を開催する予定である。



クビアカツヤカミキリ発生状況調査



「露茜」ウイロイド検定用試料の調製

## 2. 日高川町新果樹研究会がカンキツの現地研修会を実施

日高川町新果樹研究会(会長：川越安信)は、6月5日にロイヤルインダストリーズ株式会社の瀬片元治技術部長を招き、カンキツの現地研修会を開催した。

はじめに、日高川町農村環境改善センター内で、本年産カンキツ類の着花状況とこれから求められる栽培管理について、今年的气象条件を交えて講義が行われた。本年の開花期が平年より早く、また着花も多い傾向から早期摘果の実施が重要であること、また、夏期の高温干ばつによる根傷み、さらに、初秋以降の高温多雨による果皮障害への対策が、高品質果実を作るカギになることを説明され、参加者は熱心に耳を傾けていた。また、参加者からは「尿素有の葉面散布と通常施肥との使い分けや実施時期は？」など、樹体管理への熱心な質問があった。

会員の園地へ移動し、樹の状態や品種にあった栽培法の指導を受けた。特に不知火園地では、樹勢や受光環境・葉色の改善と品質や作業性の向上を目的に、夏季の切り上げ剪定の重要性について解説があった。その後、会員らが剪定を実践した。

参加者からは「夏季剪定の方法とその重要性を学べた」、「勉強になった」などの感想があった。



瀬片氏から本年産のみかんづくりの説明



「不知火」の夏季の切り上げ剪定の説明

### 3. 印南町立稲原小学校で梅の出前授業を実施

6月20日、稲原小学校6年生（15名）を対象に、梅生産者と普及指導員が講師となり、梅の出前授業を実施した。

この出前授業は、県と県教育委員会主催で農林水産業への理解と郷土愛や食に対する感謝の気持ちの醸成を目的に、平成24年度から実施している。

最初に、佐原普及指導員から、梅の生産量や栽培方法、梅の機能性、、梅干しの作り方、「みなべ・田辺の梅システム」の世界農業遺産認定などを説明した。

次に、地元の梅生産者である小田美津子氏から、子どもの頃お腹が痛いときや気分が悪いときに青梅で作った梅エキスが特効薬であったことや、梅は一年の中で寒い時期にきれいな花を咲かせ、梅雨に実を収穫し、一番暑い夏場に梅を干す。そんな中で育った梅干しは、健康に良い食べ物であると話した。その後、小田氏が冷凍梅を使った梅ジュースの作り方を実演し、説明を聞いた児童は、保存瓶に冷凍梅と砂糖を交互に入れ、梅ジュース作りを体験した。また、事前に作っていた梅シロップを使っの牛乳割りと梅ジュースを試飲した。

体験を終えた児童からは、「思っていたより簡単に作れた」、「家の人にも作ってあげたい」、「牛乳割りは、ヨーグルトみたい」などの感想が聞かれ、梅への関心が高まった様子だった。



梅ジュースの作り方を実演する  
小田美津子氏



梅ジュースづくり体験